



透明な深度

透明とは、
何もないことではなく、
余計なものが残っていない状態である。

軽いのに、浅くない。

触れても引っかかり、
しかし確かに深さがある。

その違和感は、
何も持っていないからではない。

むしろ、
持たなくていいものが残っていない。

濁りは、
弱さではない。

深く感じることや、
感情があることが、
そのまま濁りになるわけではない。

濁りになるのは、
ひとつであるはずの内側に、
別の意図が重なり続けるときだ。

どう見られるか。
どう伝わるか。
どう評価されるか。

そうした視線が混ざるほど、
存在はまっすぐ立たなくなる。

輪郭が曇るのは、
足りないからではない。

余計なものが、まだ残っているからだ。

透明に見える状態は、
整えた結果ではない。

混ざっていたものが、
静かに抜けていったあとに残る。

見せようとする力。
守ろうとする反応。
外に合わせた調整。

そうしたものが少しずつ減るほど、
内側はそのまま通るようになる。

精製とは、
何かを足すことではなく、
混ざり続けていた状態が終わることだ。

混ざらないから、軽い。
留まらないから、濁らない。

それでも、
何も起きていないわけではない。

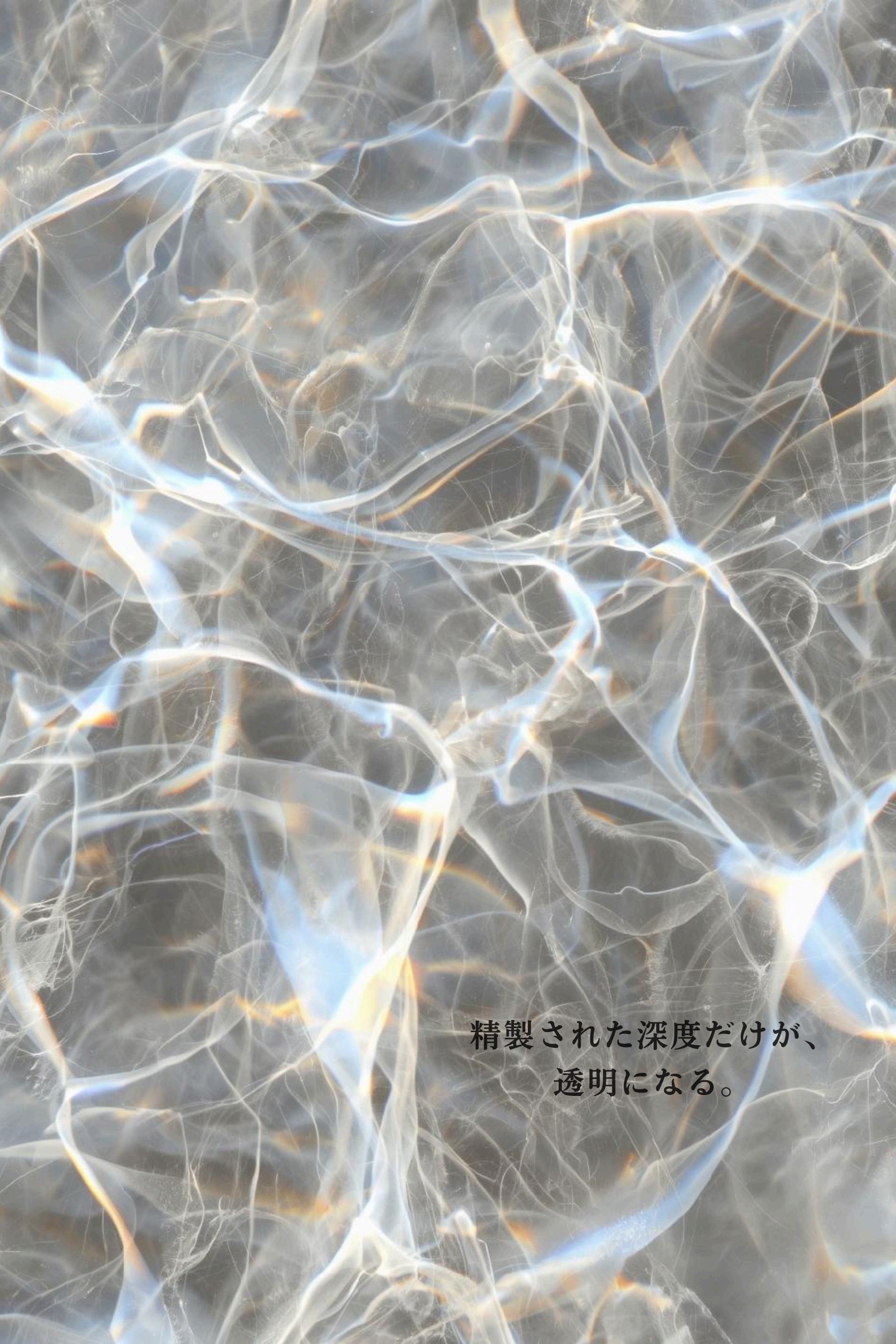
すべては通っている。

ただ、
余計な形を持って残らないだけだ。

だから、
軽く見える。

しかし、
浅くはならない。

透明さは、
深く沈んだ先にだけ現れる。

The background is a complex, abstract pattern of thin, flowing lines in shades of light blue, white, and pale yellow. These lines are set against a dark, almost black, background, creating a sense of depth and movement. The lines appear to be layered and intertwined, giving the overall image a textured, ethereal quality.

精製された深度だけが、
透明になる。



Edition — 存在の芯
別景：透明な深度

著者：美学思想家 古川玲奈
発行：Raffiné
2026